

シン・チャオ、ベトナム！—私のベトナム体験—

教授 山 野 俊 郎
(仏教学)

昨年の夏、私はベトナム南部の都市ニャチャンに1週間ほど滞在した。カインホア[県] 仏教学院の創立25周年記念の行事に出席することが、この旅の主な目的であった。仏教学院はニャチャン市のロンソン寺のなかにあり、僧・尼あわせて180人ほどが在籍している。卒業生の多くはベトナム国内の仏教大学に進学し、またタイやミャンマー、スリランカ、あるいは日本に留学する者もいるという。

創立25周年記念行事のテーマは、「カインホア仏教学院の教育—現状の課題と解決方法—」であった。そのなかで開催されたシンポジウムでは、ホーチミンからきた学者や、タイの学僧たちの発表も行われた。私の発表のタイトルは「日本の大学における仏教教育—大谷大学の場合—」である。発表の冒頭で私は、日本とベトナムの文化交流に貢献した仏哲（または仏徹、Phat Triet）というベトナム人僧侶について紹介した。ベトナムのチャンパ（林邑^{りんゆう}）出身の仏哲は、736年にインド僧菩提仙那とともに来日し、奈良の都でベトナムの音楽と舞踊（林邑楽^{りんゆうがく}）を教えた。752年に開催された東大寺の大仏開眼供養の法会では、かれの林邑楽が奉納されたという。林邑楽は1300年ほどの時をへて今日まで伝えられ、いまも演じられている。一昨年、ベトナムの古都フエで開かれたフエ・フェスティバルで



は、奈良市の舞踊楽団によって林邑楽が披露された。私の発表をきいたベトナム人の尼僧が、仏哲のことは先生のレクチャーではじめて知った、興味ぶかいお話でした、と感想を語ってくれた。

今回のささやかな交流を縁として、カインホア仏教学院から、ベトナム語訳南伝大蔵経（2015年刊、7冊）が本学に寄贈された。この南伝大蔵経は、ティック・ミン・チャウ師（Thih Minh Chau、1918～2012）が、ほとんど独力でベトナム語に翻訳したものであるという。師は1952年から10年間、インドの Nava Nalanda Mahavihara に留学。パーリ仏典と漢訳經典について研究し、博士論文は“The Chinese Madhyama Agama and the Pali Majjima Nikaya — A Comparative Study”（漢訳中阿含經とパーリ語中部經典の比較研究）である。ベトナムに帰国後、南伝大蔵経のベトナム語訳をはじめ、1965年には長部經典の

ベトナム語版が出版された。そして、2004年までに中部、増支部、相応部、および小部經典のすべての翻訳を完了し、南伝大藏經の全巻27集として出版された。今回、本学に寄贈された7冊は、2015年に再版されたものである。

ベトナムでは長い戦乱のなかで、多くの貴重な仏典が失われた。ベトナム語版南伝大藏經の出版は、ティック・ミン・チャウ師にとっても、またベトナム仏教界にとっても悲願であったと思われる。

さて、カインホア仏教学院の記念行事に出席することが決まった後、私は5月から8月まで3ヵ月間ほど、週に1回のペースでベトナム語のレッスンを受けた。シンポジウムの発表において、冒頭の自己紹介と挨拶の部分だけはベトナム語でスピーチしたい、と考えたからである。ベトナム語には「六声調」という音声の変化があり、日本人にとってベトナム語の発音はかなり難しい。発音が微妙にちがうだけで、言葉の意味がまったく異なったものになる場合も多い。たとえば、私のベトナム語のスピーチの最後の文は、「私はベトナム語があまり上手ではありません。ですから、この後は日本語で話しますが、それを<学生のニムさん>が通訳してくれます」というものであった。このなかの「学生」はベトナム語で trò (チョー) であるが、trò (末尾の o の音が下降する) をまちがえて tró (o の音が上昇する) と発音すると「犬」(chó) の意味になってしまう。<学生のニムさん>が<犬のニムさん> (!) になってしまうのだ。本番ではまちがえないよう十分に注意して trò と発音した。

私のベトナム語のスピーチは、型どおり「シン・チャオ」(Xin chào、こんにちは) ではじまる、ほんの3分間ほどの短いものである。心やさしいベトナムの聴衆の皆さんは、私が一文を読み終えるたびに拍手をして励ましてくださった。

シンポジウムが開催された日の夜、ロンソン寺の手伝いをしている在家の若者たちに誘われて、おしゃれなカフェで楽しい時間を過ごした。短大や専門学校にかよう元気な学生さんたちである。ひとりずつ英語で自己紹介をしてくれたが、そのうちの一人、専門学校でツアーガイドの勉強をしているという女学生の言葉を耳にして、私はすっかり意気消沈してしまった。「先生のベトナム語のスピーチだけど、最初の<シン・チャオ>(こんにちは)の発音がまちがってましたよ」と彼女はいう。「chào を先生は cháo と発音したけど、cháo は<こんにちは>ではなく<お粥> (!) の意味です」と。シン・チャオはベトナム語会話の基本中の基本である。そんな Xin chào の発音をまちがえるなんて。ベトナム語のスピーチが悔やまれた。

ベトナム滞在4日目の午後、かれら若者の一人がニャチャンの街を案内してくれた。バイクの後ろ座席にのせてもらって、市場や書店、食堂、カフェなどをめぐった。ベトナムの都会の道路は行きかうバイクで溢れている。バイクの洪水のなかを、流れにのってスイスイと走り抜けていく。乗りはじめのハラハラドキドキが、やがて快感に変わっていく。シン・チャオ、ベトナム！これぞ^{なま}生のベトナム体験だ、と体感したことであった。